日光山 輪王寺

「日光山」とは、日光の山中にある寺社を中心に生活し、信仰する宗教共同体全体を指す。仏教と神道は、19世紀後半に日本政府の命令で分離されるまで、1000年以上にわたって融合していた。

日光という名前は、820年にこの地を訪れたとされる空海（774-835）が提唱したといわれている。彼は、近くの霊峰である男体山の別名である「二荒山」の漢字は、日本ではいくつかの異なる読み方があるので、代わりに「にっこうさん」と読むこともできると述べた。その後、この地域や宗教団体は「日光山」と呼ばれるようになった。

輪王寺は、中禅寺湖の近くや奥日光の他の場所にも分布している。三仏堂は、その本堂である。三仏堂の向かい側の広場には、宝物殿・逍遙園がある。三仏堂の裏手には大護摩堂があり、1日3回の護摩焚きが行われている。

三仏堂の近くにある寺院の建物の簡素さは、山からもっと離れた場所にある大猷院廟の精巧な彫刻、漆塗りの壁、金塗りの多色装飾とは全く対照的である。

太融院廟は、徳川三代将軍家光（1604～1651）の永眠の地である。家光が祖父の家康（1543～1616）の陵墓の近くに建てさせたのが、東照宮の太融院である。当時は神道と仏教が融合していたこともあり、東照宮と輪王寺は別物とは考えられていなかった。実際、家康の葬儀は、日光山第五十三代住職の天海（1536?～1643）が、神道と仏教を融合させた「山王一実神道」で執り行われた。

神道、仏教、山岳信仰が歴史的に融合していたことの証左は、今でも日光の至る所に見られる。例えば、男体山、女峰山、太郎山の三山は、それぞれ輪王寺の三大本尊、千手観音（千手観音）、阿弥陀如来（光無量寿仏）、馬頭観音（馬頭観音）を表しているとされる。二荒山神社には、この三尊の神仏が祀られている。

輪王寺は1999年にユネスコの世界遺産に指定された「日光の社寺」に登録されている。輪王寺には、国宝1件、重要文化財37件、登録有形文化財4件がある。